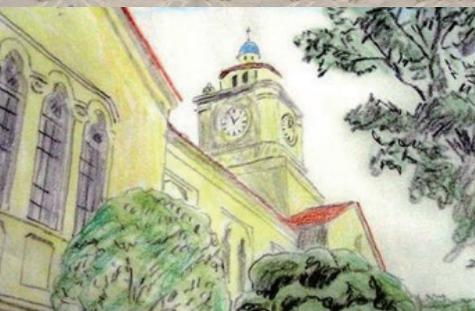


Museum News



絵：柳田基

2021 展覧会

平常展

アメリカカナダ 日本

関西学院を築いた米・加・日の人々
特集陳列

宣教師の“にっぽん”コレクション

2021.3.15(月)▶5.15(土)

平常展

1889年、アメリカ・南メソヂスト監督教会は、複数の日本人の協力によって、神戸の東にある「原田の森」(現在の王子動物園所在地)に関西学院を創立しました。さらに、1910年にはカナダ・メソヂスト教会が学院の経営に参画し、小さな私塾に過ぎなかった学院は大きく発展していきます。本展示では、3カ国の人々が協力して初期の学院を築いていく様子を紹介します。

特集陳列

カナダ・メソヂスト教会からC. J. L. ベーツとともに学院に最初に派遣された宣教師D. R. マッケンジーが日本で集めた着物と浮世絵が曾孫のポール・ウィリアムズ氏(トロント大学名誉教授)から大学博物館に寄贈されました。これを記念し、寄贈品の数々を特集陳列で展示します。

企画展

バリ 布の万華鏡

—布が伝える美のこころ—

2021.5.31(日)▶8.8(日)

※詳細は4ページをご覧ください。

平常展

2021.8.30(月)▶10.2(土)

ランバス没後100年を記念した展覧会の開催を予定しています。

企画展

第45回キリスト教美術展

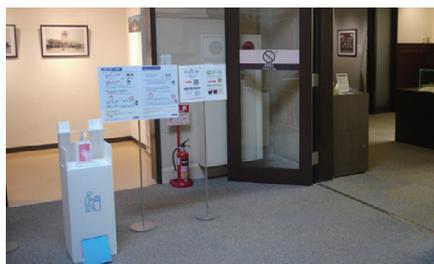
2021.10.16(土)▶12.18(日)

キリスト教美術協会と共催で第45回展覧会を開催します。

感染症下の博物館とモノの見せ方

コロナ禍の博物館

2020年度美術館・博物館は、他の様々な社会活動と同様に、新型コロナウイルスの影響を大きく受けました。周知の通り、本館も2020年4月9日から9月22日まで臨時の休館とせざるを得ませんでした。その結果、開催予定の企画展・平常展の計画を大きく見直す必要が生じ、4月からの企画展「祈りの造形」も開館数日での休館となりました。それでも、感染症対策を講じつつ9月23日に再開した後、2021年1月22日までと会期を変更して実施することで、学内の学生・教職員に限定はされていたものの、一定の人たちに展示の内容を観覧いただくことができました。他館においては、展示物の借用期間や会場の都合から、数日の開催のみとなったケースや、展示準備は完了したにも関わらず1日も開館できずに終了した企画展もあったと聞いています。その意味では、本館のおかれた状況は比較的幸福な方であったと言えるかもしれません。



エントランスでの感染症対応の様子

展示の新たな見せ方

他方において、そのような制限を受けて、各地の美術館・博物館では、様々な取り組みが見られました。例えば、東京の森美術館では、「MAM デジタル」というサイトを開設し様々なデジタルプログラムを展開しています。そのうち、会期中途中で終了となってしまった「未来と芸術展」については、館内のウォークスルー映像とYouTubeでの解説動画を組み合わせる内容を紹介する「3Dウォークスルー」を公開しています。思った以上に見やすく、展示の雰囲気も含めて、その内容を確認していくことができることに驚かされました。

また、大阪日本民芸館を会場に開催され(私も少しだけ関わった)展覧会「根の力 THE POWER OF ORIGIN」は、大阪を中心に活動する

「クリエイティブ集団」grafが全体のプランを企画したものでしたが、ここでは、人数を限定した申込み制にてavatarin(株)のサービスを活用したオンラインの観覧プログラムが提供されました。これは、「newme」というアバターロボット(自走するユニットの上部に小型のタブレット状のモニターを持つコミュニケーション型ロボット)を、自宅のPCなどから操作し、会場と双方向の通信を行いながら、展示物を閲覧しつつ、在宅のまま会場を巡ることができるものでした。

新たなツールとモノとの間

newmeは、もともとはANAホールディングスが開発したもので(その開発部門が独立して2020年4月にavatarinが誕生しています)、2019年10月にその発表に関するニュースが出ています。そこでこの主な利用として示される遠隔での買い物支援や遠方からの会議へのオンライン参加などに、そのタイミングで大きな意義を見出した人は少なかったのではないのでしょうか。Zoomのようなオンライン会議ツールも同様でしたが、これらは技術としては数年前(あるいはもっと前に)すでに完成していたものでした。それが感染症対応の中で社会的な意味を獲得してきているのだと言えます。つまり、コロナ禍の社会は、何らかのツールと社会的な需要・要請との関係を、非常にわかりやすい形で見せてくれているのです。

本館においてこうした新たな技術の導入を検討しているというわけではありません。また、前号の『博物館通信』において加藤館長が言及しているように、「モノのそばに居ることの意味を来館者と分かち合う」ことが、博物館の第一義であることは揺るがないことでしょう。一方で、上記したような事例は、モノの公開という面において、コロナ禍以前におけるリアル/ヴァーチャルという枠組みからは少しズレた可能性を示してくれたようにも思えました。大学博物館もまた社会的な存在でもありますので、モノに近くあることの意義を十分に踏まえつつ、博物館という場に対する社会的需要・要請と新たなツールとの間をしっかりと意識して「モノを見せる」ということを考えていきたいと思えます。

(大学博物館副館長 濱田琢司)

展覧会報告 |

企画展

祈りの造形

美術という視点からキリスト教の世界を紹介する企画展を開催しました。

2020.4.1(木) ▶ 6.13(土)

9:30 ~ 16:30

※休館：日曜日、祝日

(4月9日(木)～6月13日(土)は新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館)

2020.9.23(水) ▶ 2021.1.22(金)

10:30 ~ 16:00

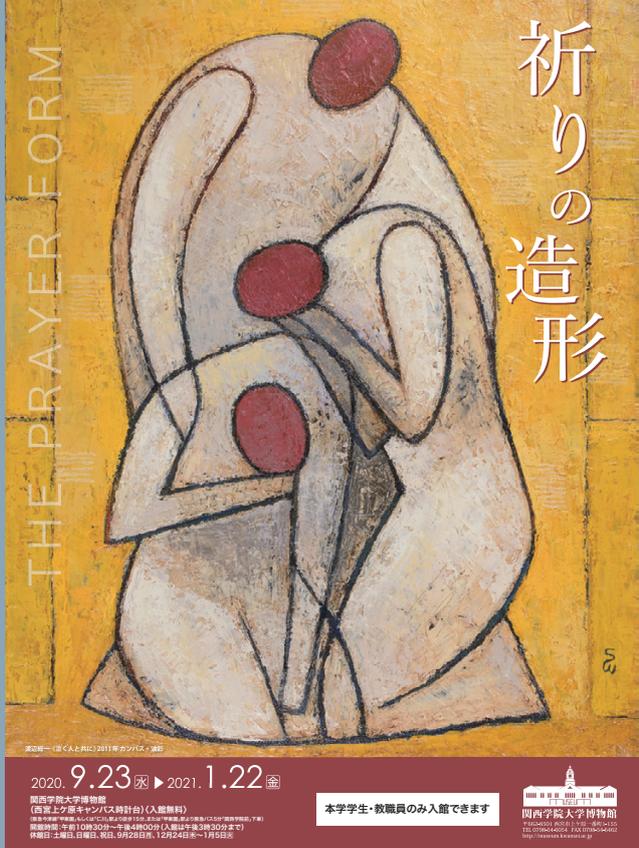
※休館：土曜日、日曜日、祝日、9.28(月)、12.24(木)～1.5(火)

※本学学生・教職員のみ入館可

開館日数 82日

入館者数 1,208人

展示再開後のポスター



新入生を迎えて

春の企画展

新入生をはじめキリスト教にあまり馴染みのない方、初めて触れる方を対象に、美術という視点からキリスト教の世界を紹介する企画展「祈りの造形」を開催しました。

キリスト教の聖典が旧約聖書と新約聖書の二つの聖書であることはよく知られていますが、これらは長い時間をかけてさまざまな執筆者によって書かれた文書を集めたものです。旧約聖書では古代(紀元前)のユダヤ民族の物語が綴られ、新約聖書で語られるイエスの生涯と死と復活は紀元前4年頃から紀元30年頃の話であるとされています。これらを時代や地域を隔てた遠い国の物語と敬遠するのではなく、より身近な存在として感じていただくため、ものがたり、うた、こころの造形という三つの視点から作品を紹介しました。

型染版画による奇跡の場面

ものがたりの造形

日本の版画家であり、キリスト者でもある渡辺禎雄の作品で聖書物語をたどりました。渡辺は聖書の物語を自身の体験、日本の風土と結びつけて表現しています。物語の象徴的な場面を取り上げ、あるいは物語の重要な図像を配置し、一つ一つのかたちを単純化して作品を構成します。そして、日本人になじみのある型染版画という技法を用いました。型紙と糊を用いて絵を染める制約の多い技法です。そこから単純で素朴なかたちが生まれます。その一方で渡辺は手の動き、身体の傾き、表情によって心の動きを巧みに

に表現しました。また、細部に日本らしい和風の器物や文様を描き込むあそびが散りばめられ、親しみやすく見ていて楽しい作品になっています。



「ものがたりの造形」展示室の様子

グレゴリオ聖歌の楽譜

うたの造形

キリスト教美術は聖書の物語や聖人を描いた絵画のことだけをさすではありません。讃美歌や聖歌と呼ばれる神・キリストの徳をほめたたえる歌は本来、音を奏で、声を出して歌うものです。それ自体が芸術ですが、ここでは歌を造形化したものとして、美しい装飾をともなうグレゴリオ聖歌の楽譜と讃美歌をテーマにした作品を紹介しました。

キリスト教の世界を表現する

こころの造形

聖書の物語や登場人物をつうじて人間の存在をみつめ、創作活動をおこなってきた作家たちによる作品も紹介しました。竹内一は聖書に登場する人物の感情表現をテーマとし、堀江優は人間の弱さをテーマに聖書の人物を描きまし

た。渡辺総一は単純なフォルムと美しい色彩によって信仰の姿を示し、五十嵐芳三はキリスト者の心のうちを彫刻として表現しました。それぞれの作品と対峙するとき、作家の心情がこころの造形として立ち現れてきます。



「こころの造形」展示室の様子

突然の閉館

コロナ感染症の影響

2020年、わたしたちの生活は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行拡大により一変しました。4月7日に政府が「緊急事態宣言」を発表し、兵庫県も社会教育施設に休館または自粛の要請を出しました。これを受けて4月9日に大学博物館も閉館します。企画展「祈りの造形」開催からわずか1週間ほどの出来事でした。

9月23日に再開館し、ようやく皆さまに展示を見ていただくことができた時には、展覧会活動ができるありがたさを実感しました。まだまだ、この感染症による生活への影響は終わりが見えません。そのなかでも、来館者のみなさまとモノを分かち合っていく展覧会活動を安全な方法で続けていきたいと思っています。

開催中の展覧会

特集陳列

宣教師たちの“にっぽん” コレクション

学院の草創期を支えたカナダ人宣教師、D. R. マッケンジーが日本で収集し、母国へ持ち帰った浮世絵や着物が大学博物館に寄贈されました。これを記念し、寄贈品の数々をご紹介します。

前期 2021.3.15日 ▶ 4.16日

後期 2021.4.17日 ▶ 5.15日

2021.3.15日 ▶ 3.31日 10:30 ~ 16:00

2021.4. 1日 ▶ 5.15日 9:30 ~ 16:30

※日曜日、3.23日、3.27日、4.29日、5.3日 ~ 5日は休館



クリスチャンとして

日本伝道を志し、金沢へ

マッケンジー (McKenzie, Daniel Rial, 1861-1935) はカナダのオンタリオ州で、7人兄弟の末子として生まれました。16歳から雑貨店で働くようになった彼は、この間に「人生における非常に重大な岐路を迎えた (there came the great crisis in my life)」と手記に記しています。彼は100人以上の若者とともにリバイバル集會に参加し、クリスチャンとして教会とともに生きることを決意したのです。

日本伝道の先駆者であったカナダ・メソヂスト教会のC. S. イビーは、日本の高等教育体制が整えられていくなかで、英語教師が求められていることを知りました。そこで教会に人を派遣するよう要請したところ、最初に志願したのがマッケンジーでした。彼はイビー自給バンド（正規の宣教師とは異なり、必要な経費を自給して活動する伝道隊）の一員として1887年夏に来日し、金沢に赴任します。金沢では第四高等学校（現・金沢大学）で英語とラテン語を教えたほか、英学院の設立などに取り組みました。



展示風景

本展で展示している着物は金沢滞在中に収集したものだと考えられています。このうち《菊模様友禅染小児着物》（後期展示）は長女エセルが1、2歳の頃に着用している写真も残されています。目に鮮やかな化学染料を用いた型友禅はいかにも明治時代らしい着物です。このほか《万筋模様御召着物》（通期展示）や《御召袴》（前期展示）に用いられた御召縮緬は、江戸時代に幕府の将軍など高貴な人物が着用する御召料とされたもので、明治時代以降も非常に高価でした。また三井呉服店の案内書である『夏衣』（1899年発行）で御召は男子夏物流行衣裳として紹介されており、明治時代末年の服飾の流行がうかがえます。

草創期の関西学院へ 学院の財務長官

日本語の上達が早かったマッケンジーは自給バンドの解散後カナダ・メソヂスト教会の正規の宣教師となり、1908年には書記・会計に任命されました。そして関西学院の米加合同経営案を強力に支持し、これが1910年に正式決定されると学院の理事に就任します。このときともに学院に派遣されたのが、のちに第4代院長となるC. J. L. ベーツでした。この時代の学院の歴史については、平常展で詳しくご覧いただけます。数字に強く、財務能力に長けたマッケンジーは学院の財政基盤を整え、「財務長官」と呼ばれました。1913年には教会の命により東京への転任が決まりましたが、その後も長年学院の理事を務めました。

マッケンジーは1933年に引退しカナダに一時的帰国しますが、のちに再び来日します。そして

父の意志を継ぎ来日し、宣教活動に励んでいた長男アーサー一家とともに暮らしました。自ら浅間健児と名乗り、江戸っ子ばりの巧みな日本語を使いこなしたアーサーは、32年からは関西学院で教師を務め、学生からはマツケン先生と呼ばれました。第二次世界大戦中は国際情勢の悪化に伴い帰国しましたが、戦後いち早く関西学院に帰任し、再び教鞭をとりました。



理事会メンバー（1929年頃、マッケンジーは最前列中央）

5世代にわたって

現在につながる親交

今回出品する浮世絵7点、着物等8点は、マッケンジーの曾孫にあたるポール・ウィリアムズ氏（トロント大学名誉教授）から、2018年と19年に寄贈されたものです。曾祖父の生涯に関心をお持ちのウィリアムズ氏は、現在本学でカナダ研究客員教授を務めておられます。2017年にはご子息のイアンさんとともに来校され、5世代にわたるかけがえのない縁が繋がりました。会期中の来日は残念ながら叶いませんが、マッケンジーの足跡を辿る本展が開催されたことを非常に喜んでくださっています。



次回の企画展

バリ 布の万華鏡

— 布が伝える美のこころ —

前期 2021.5.31(日) ▶ 6.30(水)

後期 2021.7.2(金) ▶ 8.8(日)

※休館日:日曜(但し8/8は開館)、祝日、7/1(展示替えのため休館)

インドネシアの国家資格である「婚礼衣装美容着付師」の資格保有者である武居郁子氏のコレクションから、インドネシアバリ島の服飾文化を紹介する展覧会を開催します。インドネシアは世界最大のイスラム教国として知られていますが、バリ島は島民の九割がヒンドゥー教徒です。バリのヒンドゥー教は土着の文化と融合し、儀礼を重んじる特有の信仰の形を示しています。バリの人たちは、さまざまな伝統儀礼や通過儀礼、婚礼、葬儀とともに生き、そこでは儀礼ごとに定められた伝統衣装を身に纏います。



武居郁子氏による着付け
着付けている衣装は、中流階級のメディアスタイルの女性婚礼衣装（バドゥン県デンパサール）。

バリの伝統衣装は長方形の布を身体に巻き付け、装身具や頭飾布をつけるというものです。一枚の布は身体に巻き付けることで立体的な衣装へと変化します。また同じ布がその時々で肩掛けとして、あるいは胸に巻く布としてなどと色々な用途で用いられます。彩り豊かな布が変化しながら美を紡ぐ姿はさながら万華鏡のようです。こう

した布の中には祖母から母へ、母から娘へと代々受け継がれてきた布や魔除けの布として神聖視される布のほか、着用者が生涯を共にする布もあります。バリ文化を表象する布の数々をご紹介します。

本展覧会では、布、装飾品の展示に加え、トルソーに着付けた衣装としての布をご覧ください。



肩布 花鳥模様更紗（部分）
中国から渡った絹に蠟防染した更紗。中国風の鳳凰模様はレンバンと呼ばれる古布。



肩布 ワヤン模様経緯緋（部分）
グリーンシンと呼ばれるバリ島トゥンガナン村で織られる経緯緋の布。インドネシアの伝統的な影絵人形ワヤンの模様。



マディアスタイルの女性婚礼髪飾り
(バドゥン県デンパサール)
たくさんの簪を挿して花冠にかたどる。



腰布 聖樹模様縫取織
金糸を織り込んだ縫取織の古布。模様はブンミンガンと呼ばれ、聖樹をモチーフにしたもの。



関西学院大学博物館通信 第10号

KGU MUSEUM NEWS No.10

2021.4.12

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ケ原一番町1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <https://www.kwansei.ac.jp/museum>